

## 兵庫の災害に関する記憶や記録を可視化、共有するための試み ～1938年阪神大水害の事例を通して～

### 兵庫県立大学＋神戸市立渚中学校

#### ➤ 阪神大水害概要

1938年（昭和13年）7月3日から5日にかけて、台風に刺激された梅雨前線が西日本に停滞し、神戸市を中心に集中豪雨が降りました。3日の夕方から降り出した雨は5日の午後1時20分に降り止むまでに461.8mmの降水量を記録した。この総雨量が原因で六甲山の各所で土砂崩れが発生し、市域の河川が氾濫すると同時に、巨石や流木、土砂の入り混じった土石流が神戸の市街地に流れ込んだ。神戸市における被災家屋は89,715戸、死者は616名と甚大な被害となった。この集中豪雨による近隣の被害も含めて「阪神大水害」と呼ぶ。

#### ➤ 背景と目的

このような甚大な被害をもたらした災害にも関わらず、水害から80年経った今残されている記録は、アナログ媒体のみであり、この災害に関する情報の収集と教訓の継承が必要不可欠となっている。

本取り組みでは、中・高生を対象とし、語り部との口述のコミュニケーションや、それに基づく被災地フィールドワークを通じて、被災体験者の記憶や記録を次世代へと継承するためのデジタルアーカイブの構築を行なった。



←濁流の押し寄せたそごう付近（三宮）（神戸市中央区）



濁流の流れる三宮駅前国道（神戸市中央区）→

#### ➤ 阪神大水害の記憶の継承の概要

国土交通省近畿整備局六甲砂防事務所（以下、六甲砂防と略す）との協働で実施したワークショップやフィールドワーク（まちあるき）、この水害の経験者や伝承者の口述によるコミュニケーション（インタビュー）について流域ごとに示す。

流域	協力団体	実施日時	実施場所	実施内容
新湊川流域	神戸市立常盤女子高等学校	2018年7月31日	神戸市立常盤女子高等学校	ワークショップ
住吉川流域	神戸市立住吉中学校	2018年7月31日	神戸市立住吉中学校	ワークショップ
都賀川流域	神戸市立渚中学校	2018年8月8日	神戸市立渚中学校	ワークショップ
新生田川、宇治川流域	神戸市立渚中学校	2018年8月1日	神戸市立渚中学校	ワークショップ



GISアプリケーション

デジタルアーカイブと伝承のプロセス

#### (1) 各流域におけるワークショップの実施概要

##### 新湊川流域（神戸市長田区）

日時：2018年7月31日  
対象：神戸常盤女子高等学校 生徒会  
常盤女子高校の生徒会では長田神社の宮司さんのご指導により、神社境内の過去の写真の被災位置を特定し、被災時のエピソードとともに紙地図に書き込んだ。



##### 住吉川流域（神戸市東灘区）

日時：2018年7月31日  
対象：神戸市立住吉中学校 生徒会生徒5人  
住吉川流域に位置する住吉中学校で阪神大水害の勉強会を実施した。講師は六甲砂防が派遣した砂防の専門家であった。生徒たちは阪神大水害の概要や当時の被害の様子などを学び、住吉神社の宮司さんへのインタビュー内容を考えた。考えた内容に基づいて、宮司さんに当時の被害の状況、経験したことやその時感じたことなどをうかがった。宮司さんの話す内容のうち、必要なものについては事前に準備した住吉川、住吉小学校周辺を含む紙地図に書き込んだ。



##### 新生田川、宇治川流域（神戸市中央区）

日時：2018年8月1日  
対象：神戸市立渚中学校 防災ジュニアリーダー 生徒  
事前に六甲砂防が当時小学生だった経験者に対してインタビューを行った。インタビューの内容は水害当日の様子、学校から家に避難する時の光景などであった。渚中学生のまちあるきとして、その経験者が当時たどった小学校から自宅までの道のりを歩いた。また、神戸市中央図書館で須磨区千森川から灘区石屋間川にある流域ごとに描かれた当時の被災状況の神戸大水害絵巻物を見学した。



##### 都賀川流域（神戸市灘区）

日時：2018年8月8日  
対象：神戸市立渚中学校 防災ジュニアリーダー 生徒  
防災ジュニアリーダーの生徒は2チームに分かれ、流域の南北それぞれを担当し、過去の写真の位置を特定するためのまちあるきを実施した。北側のまちあるきでは「神戸アーカイブ写真館」、南側では「灘区新在家ふれあいのまちづくり協議会」に協力をいただいた。生徒は過去の写真をもとにまちあるきを実施し、当時と同じ位置からの写真を撮影し、インタビュー内容を記録した。また、スマートフォンでGISのアプリケーションを用いて、電子地図上に写真と共にエピソードを入力した。



#### ➤ 取り組みの意義

情報の長期的な保存  
紙に残る資料や被害に関する映像、被災体験者の語りを通じて体験をデジタルアーカイブとして保存

コミュニケーションの場を創出  
ワークショップを通じた被災体験者とのコミュニケーションや、インターネットを通じた電子の場を活用して、記憶や記録を共有する場を作る

位置情報が教えてくれること  
情報を可視化することによって明確にできたこと  
-ポイントの場所と関連情報  
-地域、エリアの俯瞰的な情報

情報に対して責任感を持つ  
情報を提供する・作成するといった作業を通じて、情報を受ける側ではなく発信する側になることで責任感や我が事意識が生まれる

#### ➤ まとめ

災害など過去に起こったことに目を向け、そこから教訓を引き出し、社会的な記憶として保存、継承することは重要である。渚中学校などの中・高生を対象にしたまちあるきやワークショップを実施した。構築のプロセスの中・高生が参加することは、阪神大水害の記憶と記録を次世代に継承することの中の「次世代に継承する」という趣旨に合致し、教育的にも意義深いと考える。

#### ➤ デジタルアーカイブが公開されました

本取り組み、また、一般から寄せられた写真、体験談などは、どなたでもインターネットから自由に閲覧できるように「阪神大水害デジタルアーカイブ」として保存し、11月24日に一般公開されました。以下の添付が阪神大水害デジタルアーカイブのホームページです。

<http://www.kkr.mlit.go.jp/rokkko/S13/index.php>

